

## 2. 食品群別摂取量

### 1) 全国1人1日当り食品摂取量

食品摂取量を前年と比較すると総体的に停滞を示しているが、主食全体としては食糧構成上の比率を低め、食内容が質的に向上していることを示している。

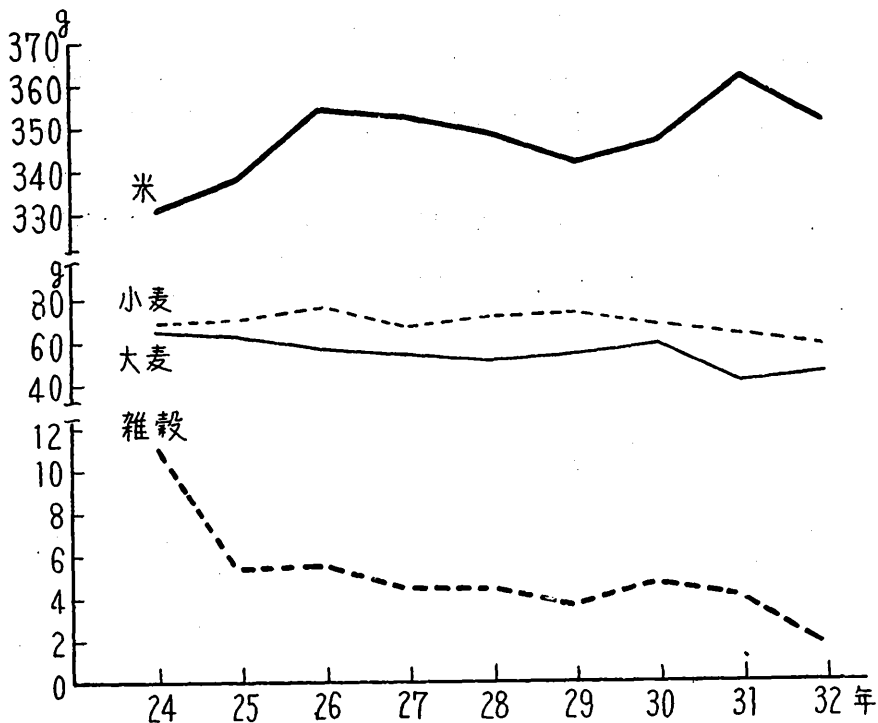
しかし、ここ数年来の傾向をみると、米の豊作により白米の消費が増加したが、小麦粉類（パン、麺）の摂取は停滞ないしは若干の減少傾向がみられ、戦後つちかわれつつあつた粉食化傾向はやや退潮的である。

また、前年と比べて動物性食品の摂取量は、その総量においては変りないが鮮魚類が減少し、半乾物、乾物（加工食品を含む）としての摂取が増加している。

獣鳥肉類、乳及び乳製品の消費は前年よりやや減少しているが、31年に激増しているので、30年に比べると相当量の増量である。

次に食品群別にその内容について述べる。

第5図 穀類の摂取状況（年次推移）



第13表 穀類の摂取比率（年次推移）

年 度	24年	25	26	27	28	29	30	31	32
総 数	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
米	70.4	71.0	71.5	73.3	73.2	72.1	72.3	76.6	76.6
大 麦	13.3	13.4	12.0	11.7	10.8	11.7	12.5	8.7	9.9
小 麦	13.9	14.4	15.4	14.1	15.1	15.4	14.2	13.9	13.0
雑 穀	2.4	1.2	1.1	0.9	0.9	0.8	1.0	0.8	0.5

(4) 穀 類

前年度と比較すると第5図にみられるように米及び小麦、雑穀類の摂取量がやや減少したが、大麦の消費が若干増加している。穀類全量としてみると3.4%の減量である。

米

米の消費量は351.2gで前年より3.2%減少している。しかし主食中における米の占める割合は第13表にみられる如く年年高まり31, 32年では76.6%に及んでいる。

季節別にみると2月が摂取量多く、8月に少くその差は36.4gである。年次推移をみると、21年が最も少なく(241.1g)、現在の%量程度であつたが、24年より漸次増加をみせ29, 30年には若干減少したが、31年には米の豊作を反映し戦後最高の362.7gを示した。

大 麦

前年に比較すると大麦の使用量は3.7g増加した。

季節別にみると2月が多く8月に少く、また年次別にみると25年までは60gを上回る消費をみせていたが26~29年にはやや減少し、さらに31年には41.5gに減っている。

小 麦

小麦類の消費は、29年までは70gを上回る数値を示していたが、30年には68.3g、31年には65.9g、32年にはさらに前年より9.4%下回る59.7gに減っている。

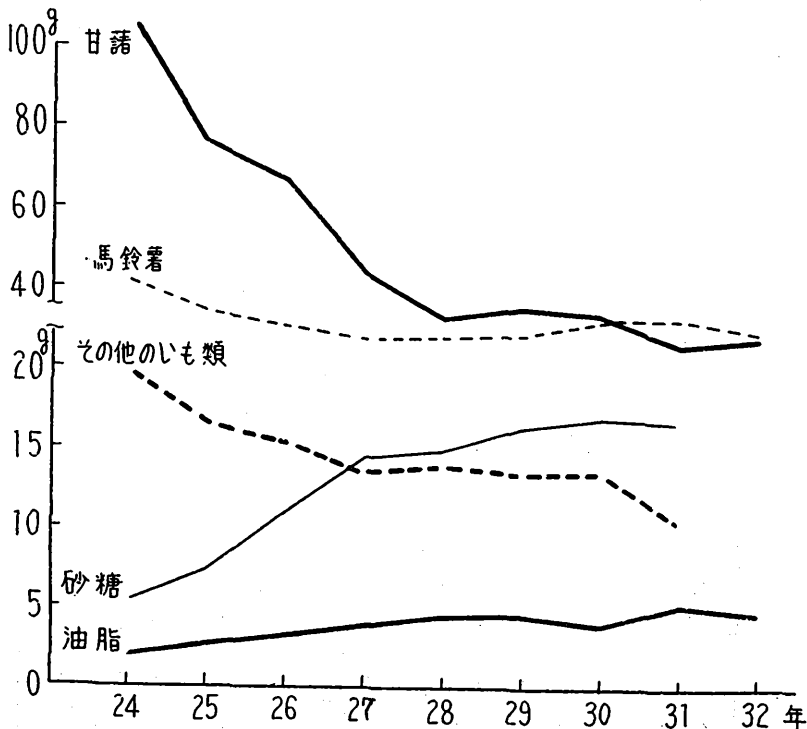
このように戦後かなり伸びをみせていた粉食化傾向は、米の豊作により若干後退したかの如くである。

季節別にみると麵の消費は8月に多く5月に少く、パンの消費は逆に5月多く8月に少い。

雑 穀

雑穀の消費量は、終戦直後の21年には15.3g、22年にはさらに上回る22.2gとかなり多い量を占めて

第6図 いも、砂糖、油脂類の摂取状況 (年次推移)



いたが、25年には5.5gに減り、以後漸減しつつあり、32年には僅か2.1gを数えるのみである。

#### (ロ) いも類

いも類は、食糧事情の悪かつた時期にはその需要も旺盛であつたが、最近はその摂取量も第6図にみられるように頭打ちの状態となり漸次下降に転じている。しかし、32年にはやや持直した感じである。

季節別にみると11月に多く116.2g、少かつたのは5月の54.1gで11月の半量以下である。これを品目別にみると、甘藷は8月は僅か6.5gを示すにすぎなかつたが、収穫直後の11月には58.3gと著しく増大し、馬鈴薯は8月に多く(48.2g)11月(19.6g)に少く、その他のいも類も収穫後の11月には26.3gとかなりの量を示していたが、8月には1.7gになる等いも類は季節の摂取差が大きい。

これを年次別にみると、21、22年には270g前後を示したが、25年には127.2g、さらに27年84g、31年68gとなつたが32年には78gに昇つている。

甘藷についてみると24年までは100gを越えていたが、逐年減少し31年には25.3g、32年には27.5gとなつた。

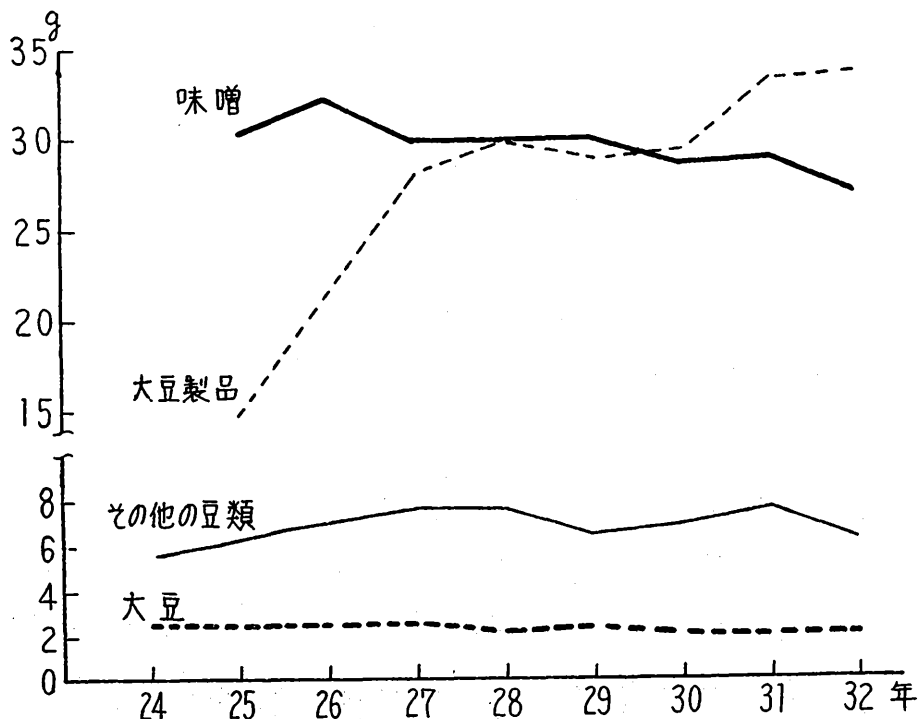
馬鈴薯は、当初の食糧事情の悪い時期からみるとかなりの減量をみたが、その減少率は甘藷ほど著しくない。なお、25年頃からその消費量はほぼ30g前後と固定している。

#### (ハ) 砂糖類

第6図にみられるように数年来消費量は、ほぼ一定し、およそ15g前後の数値を示していたが、32年には10.3gに減少した。ただし、これは32年より食品分類が若干異なり従来砂糖類に分類されていたドロップ、チョコレート、キャラメル、ヌガーを始めとして50%以上砂糖を含む菓子類を別に一項目設け集計されたためである。

#### (ニ) 油脂類

第7図 豆類の摂取状況(年次推移)



油脂類は、調査当初の 22, 23 年頃は 1.2g と極めて低い状態にあつたが、24 年以降は第 6 図にみられるように逐年増加し、28 年 4.2g, 31 年 5.1g と増加をみせたが、32 年には 4.8g に落ちている。

なお、バター、マーガリンの消費量は、油脂類の全量 4.8g 中僅か 0.8g を占めるに過ぎない。

### ㈣ 豆 類

豆類は第 7 図にみられるようにここ数年来著しい増減はみられない。これを品目別にみると味噌の使用量は逐年僅少なから減少の傾向をみせ、32 年の摂取量は 27.5g である。これに反し大豆製品の使用量は、数年来緩慢なカーブをもつて上昇し 32 年度の摂取量は 34.0g である。

大豆及びその他の豆類の消費量は数年来停滞の傾向にある。

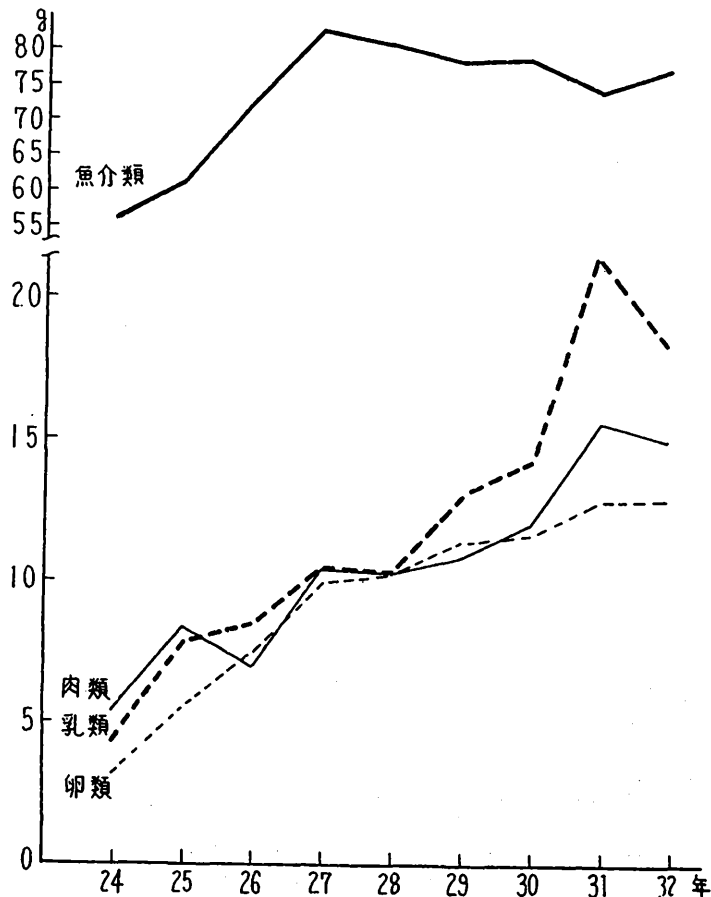
季節変動についてみると、いずれも 2 月の消費量が高く、8 月に低くなつている。

### ㈤ 動物性食品

動物性食品の摂取量は、第 8 図にみられるように逐年増加傾向を示していたが、昭和 32 年はやや停滞している。その内容についてみると、魚介類の消費量は 27 年の 82.3g (生物 71.1g, 乾物 11.2g) を頂点として下降に転じているが、32 年には若干持直し、前年の摂取量の 72.7g をやや上回る 75.9g となつた。

なお、その消費内容を見ると鮮魚介の消費は逐年とみに減少し 31 年に 47.0g を示したものが、32 年には 43.9g に減つている。しかし、乾物半乾物等の加工品の占める割合は、著しく増加している。

第 8 図 動物性食品の摂取状況 (年次推移)



獣鳥肉類、卵類、乳及び乳製品の年次別消費をみると比較的順調な伸びをみせていたが、31年には、特に乳及び乳製品の増加をみた。しかし、32年は相対的に停滞ないしは若干の減量をみせている。すなわち、24年には僅か 5.4g であつた獣鳥肉類が31、32年には約3倍に相当する 15.0g、卵類は24年の3.2g が32年には約4倍の 12.8g、乳及び乳製品は 4.1g が31年には5.3倍 (21.5g)、32年には4.6倍 (18.4g) といずれも飛躍的な伸びをみせている。

なお、これらの好転したあとをふり返つてみると27年を断層として急速に伸びたことがうかがわれる。

## (b) 野菜及び果実類

全国平均において野菜、果実類の消費は第9図にみられるように前年とほとんど変りない。これを年次別にみると緑黄色野菜は、

21年には 153.8g と相当量摂取されたが逐年減少し、31~32年には50gをやや下回るまでにいたり、はなはだ遺憾なことといわねばならない。

その他の野菜類も当初からみると、減量はしているが、ここ数年来ほぼ一定し 110~120g の線を維持している。

しかし、果実類(柑橘類及びトマトを含む。)は年々大巾な消費増加をみせ21年には 16.9g であつたものが、32年には約4倍の 64.0g にまで伸びている。

しかし、緑黄色野菜の減少のため野菜、果実の総量としては漸減傾向にある。

## 2) 業態別1人1日当り食品摂取量

業態別に食品の摂取状況を比較してみると、生産者世帯では自家生産物に強く依存している関係から植物性食品が多く、特に白米食の傾向が著しく食糧構成上多くの欠陥がみられる。

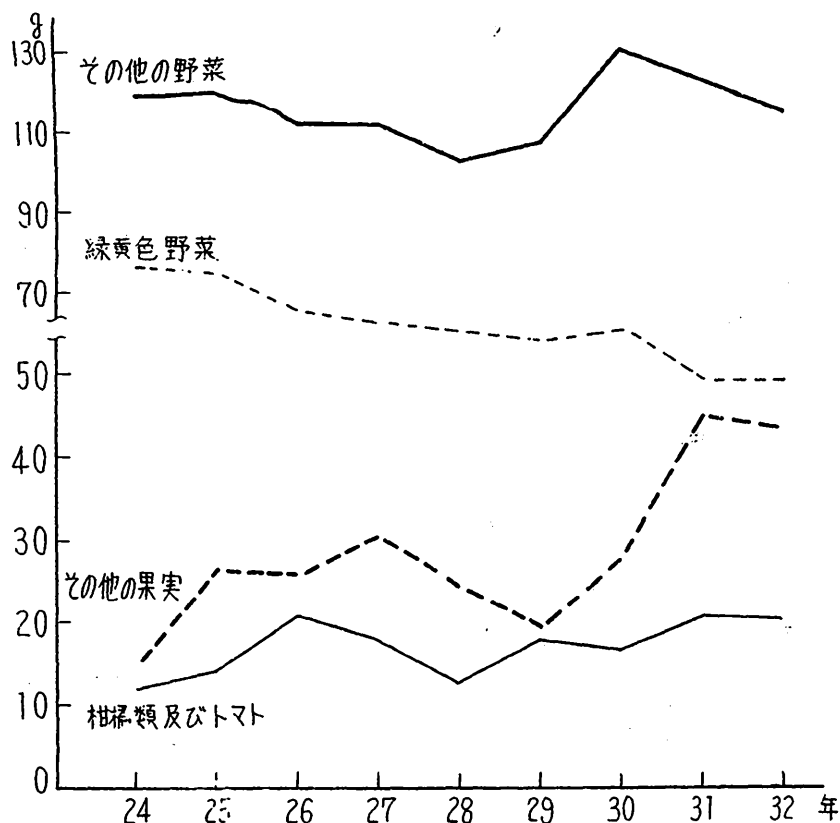
消費者世帯の消費構造はその質的構成において最もすぐれ、特に常用勤労者世帯では文化的、しや侈的内容をもつた消費傾向が多分にみられるようになった。

しかし、日雇及び家内労働者世帯では主食のような必需性の強い食品の比重が依然として大きく、動物性食品、野菜、果実等の副食の構成は極めて粗悪で、食生活水準が相当低位にあることが想像できる。

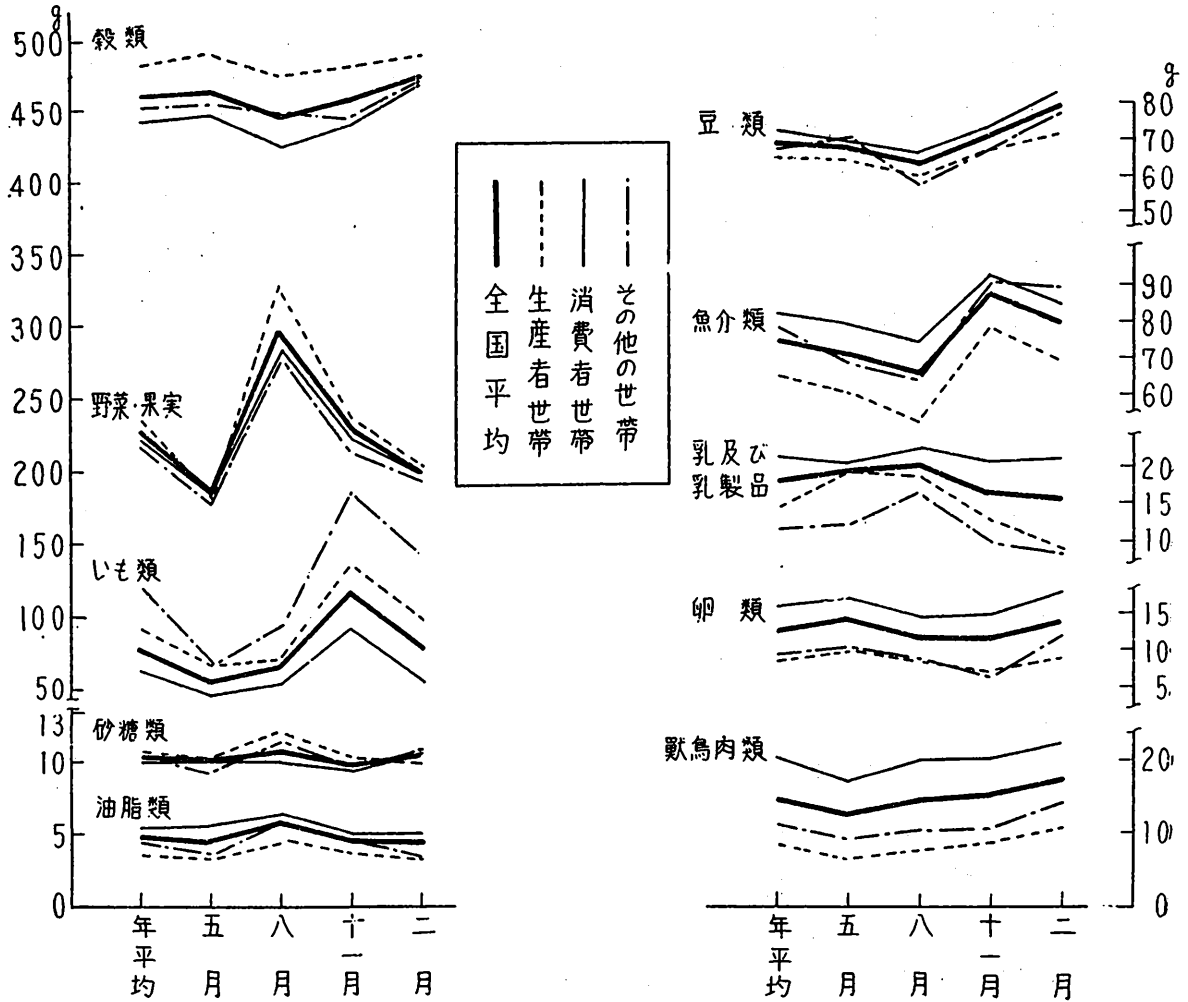
次に業態別にその消費内容について述べる。

### (1) 生産者世帯

第9図 野菜、果実類の摂取状況 (年次推移)



第 10 図 食 品 群 別 摂 取 量 ( 季 節 別 )



生産者世帯については、消費者世帯に比して米、甘藷、大豆、味噌及び野菜類の消費が多く、特に米の摂取量は 36.3g 多い等、白米食の傾向が著しい。これに反し、油脂類、動物性食品の摂取量は、消費者世帯のおよそ 1/2 程度を示すのみで極めて少い。ただ、生乳の消費は、近年とみに高まり消費者世帯とほぼ同一水準に達している。

( 四 ) 消費者世帯

消費者世帯では動物性食品、油脂、果実等の消費が多く、食糧構成は生産者世帯及びその他の世帯よりもはるかにすぐれている。

内容についてみると小麦類では消費者世帯の場合、パン、菓子パン、生麺等の形の消費が多くなっている。すなわち、消費者世帯の食パンの消費は、小麦類(全量 70.7g)の 31.1% を占めるが、生産者世帯では(全量 45.3g)の 10.4% である。

いも類についてみると生産、その他の両世帯ではいずれも馬鈴薯より甘藷の使用量が多いが、消費者世帯では甘藷より馬鈴薯の消費の多いのも一つの特色である。

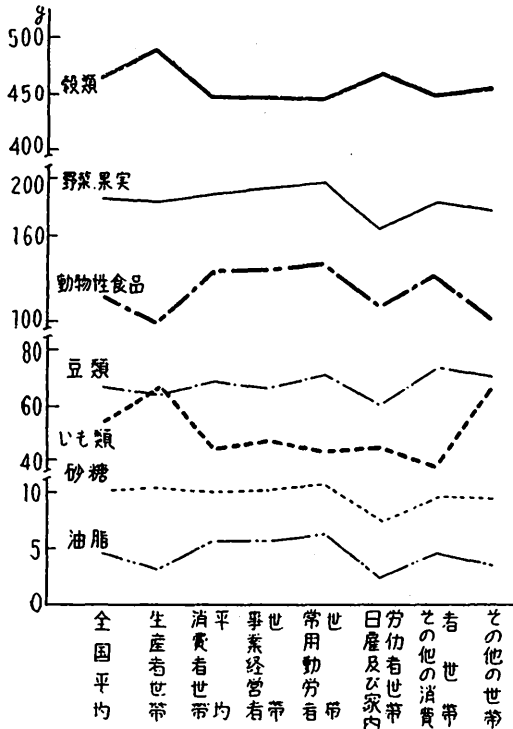
豆類は大豆製品(味噌を除く)が多く味噌の消費は少い。

動物性食品では鮮魚、練製品、獣鳥肉類の消費が多いが、魚介類のうち乾物、半乾物は業態別の摂取差が比較的少い。

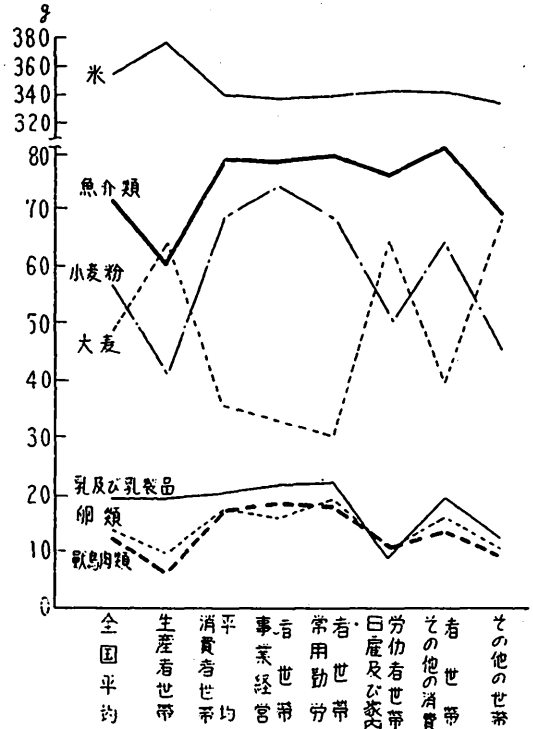
生乳の消費は、生産者世帯もかなり多く、消費者世帯との間にあまり差はないが乳製品は消費者世帯が多く消費されている。

次に5月調査においては消費者世帯を更に4業態に細分して食品摂取量を算出しているの、その内容について検討する。

第 11 図 食品群別摂取量 (業態別・5月調査)



穀類、動物性食品の摂取状況 (業態別・5月調査)



事業経営者世帯

消費者世帯平均に比べて米、大麦、豆類、緑黄色野菜、果実の消費量が僅かに低いが、魚介類、獣鳥肉類、乳及び乳製品の消費がやや多く、僅かながら食糧構成は上位にある。なお、常用勤労者世帯と比較すると、比較的類似した食形態をなしているが、全般的にやや劣っている。

常用勤労者世帯

穀類いも類の消費は業態中最も少いが、油脂類 (6.3g)、魚介類 (79.4g)、卵類 (19.4g)、乳及び乳製品 (22.1g)、果実類 (44.1g) 等の副食品の消費は全業態中最も多く食糧構成は最もすぐれている。

日雇及び家内労働者世帯

穀類の消費量は、生産者世帯に次いで多く、総量で466.3gで最低の常用勤労者世帯の441.2gより25.1g多くなっている。

砂糖類、油脂類は全業態中最低で前者は7.6g、後者は僅か2.5gである。動物性食品についてみると、乳及び乳製品は全業態中最下位の9.1gであり、他の動物性食品は消費者世帯中では最低であるが、生産者世帯、その他の世帯と比較した場合はやや上回っている。

また、野菜、果実類の消費量も他業態と比較した場合かなり劣る等、食糧消費水準は他業態と比べ相当低位にあることが容易に想像できる。

その他の消費者世帯

消費者世帯平均に比べて穀類，豆類等の植物性食品の消費割合が若干高いが，砂糖，油脂，動物性食品等の摂取量は若干低く，消費者世帯平均より多少劣っている。

い) その他の世帯

米の消費量は業態中最も少く 330.1g であるが，大麦の使用量は最も多く米の 21.3% (70.6g) を占めている。

また，いも類の消費も最も多く年平均 121.9g で，消費者世帯のおよそ倍量に及んでいる。動物性食品，豆類，油脂類は消費者世帯よりかなり低い，生産者世帯より上位にある。総じてその他の世帯は大麥，いも類の消費が多く，動物性食品に欠けた低い水準にあることがわかる。

3. 食品群別栄養構成 (熱量及び各栄養素の摂取比率)

前項までは各栄養素別摂取量とこれを裏付けている食品摂取量について記述してきたが，更に食品群別の熱量及び栄養素比率について検討すると次のとおりである。

1) 熱 量

熱量のうち穀類からの摂取は，第 12 図にみられるように 27 年は 75.2% であつたが，逐年僅少なながら減少し，32 年には 72.2% となつた。この内訳をみると，米の占める割合はおよそ 57% で変りないが麦類が減少している。

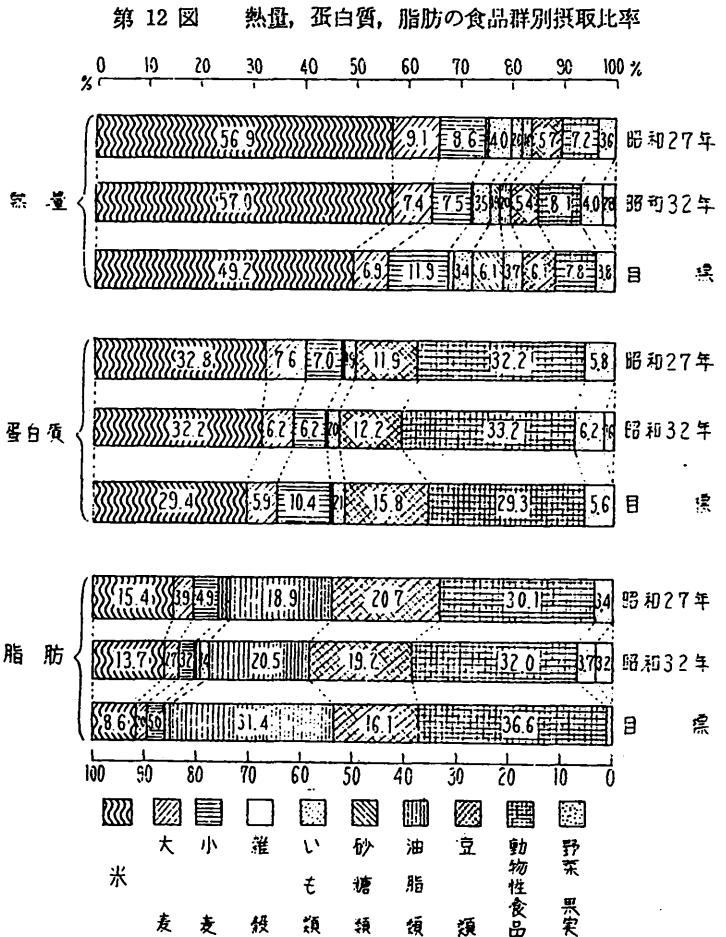
油脂類からの熱量摂取率は，27 年の 1.6% が 32 年には 2.0%，動物性食品は 27 年の 7.2% が 32 年は 8.1% と若干向上している。

砂糖類の占める割合は前年より減つているが，これは食品分類に若干の変更があり，従来砂糖類に入つていたドロップ，キラメル，ヌガー，チョコレート，その他 50% 以上砂糖を含む菓子類を別に分類しているためである。

2) 蛋 白 質

蛋白質のうち，動物性食品からの

供給は年々向上し，第 12 図にみられるように，32 年には 33.2% を示し，最低基準である 30% を上回るまでにいたつたが，量的にはまだかなりの不足を示していることは前述のとおりである。



注) 目標は昭和31年4月総理府資源調査会が策定した日本人の食糧構成表より算出したものである。